中川村消防団の出初め式

共に生きる社会システム

支え合いと協働で安心の村づくり

一人ひとりが自分らしく生きるには、安心に裏打ちされた生活が必要不可欠です。人と人が親密に支え合っているコミュニティでは、安心感が素地になって、前向きにいきいき暮らすことができます。

暮らしの基盤をつくる

地域の暮らしと建設業

交通通信網や上下水道など、村の生活・産業基盤の整備は近年着実に進みました。その重点はこれまでのハード整備から、「地域に今あるもの」の良さを再認識し、ハード・ソフト両面による、地域にとって最適な環境を実現することに移ってきています。

地元の建設業は、村道、私道などの整備だけでなく、村の暮らし全般に広く関わってきました。地域の生活に密着したノウハウは、維持管理が重要視されるこれからの時代にあって、より有効に発揮されるものと考えられます。

「村のことがわかっているから、邪魔な木を伐ったり危険箇所を直したりと、安全安心の村づくりに貢献できるのです。これからは親を看るように、中川村というわが家をメンテナンスしていくのが地元建設業の役割」と、田島建設(株)の桃沢傳(つたえ)社長はいいます。村の建設業協会では、村と除雪協定や災害協定を結び、公共空間の維持管理や冬場の除雪作業などに当たっています。専門知識と技術がそろった地元業者だからできる、安全安心への取り組みです。

村の防災組織

安全安心な暮らしの担い手として、地域の消防団があります。中川村消防団は現在2分団7部体制をしき、村の暮らしに欠かせない役割を果たしています。

一方で、災害等の被害を最小限に留めるには、住民の防災意識高揚と日ごろの備えが重要になります。村内各地区を単位とした自主防災組織が置かれ、防災週間を中心に各種訓練を行っています。もしもの時の安否確認や避難場所の維持管理のために自主防災組織の役割は大きく、今後一層の育成が望まれます。

整備された生活道路(農免農道葛島地区)

生活の価値向上をめざして

巡回バスで登校する小学生。子どもやお年寄りはもちろん、高校生の通学にも利用されており、生活の足として欠かせない存在

地域の足 村営巡回バス

中川村は昭和46(1971)年5月、県下に先駆けて村営バス運行を始めました。この歴史を素地に、平成16(2004)年から始まった新交通システム3事業―「村営巡回バス」「自家用車有償運送事業」「福祉輸送サービス」は、通学・通院・買い物などの日常生活を支える公共交通としてしっかり定着しました。巡回バスの一日平均利用者は、昨年度実績で一般が86人、小中学生が50人と、高い数値を示しています。

この巡回バスとデマンドタクシーは、住民と行政の協働により日本で最初に誕生しました。住民がつくるNPO法人と行政が協力し合い、地元説明会を開催しながら路線や時刻の決定、全体の仕組みづくりに試行錯誤を重ね生まれたのです。住民の目線で地域にとって望ましい形にした新規事業です。

住民による景観整備活動

美里そばの会(美里)は、遊休荒廃地を自分たちの手でなんとかしたいとの思いから、地区の有志が集い結成され、そば栽培を15年以上も続けています。

8月のお盆ころに種を播き、収穫は11月上旬。その間、可憐な白い花が谷あいを一面彩り、美しい山村景観が楽しめます。栽培地は標高800メートル前後に散在するため、良質なそばの栽培適地でもあります。地域のためにみんなでいっしょに汗を流し、作業後の慰労会を楽しみながら、荒廃地が美しく生まれ変わることを願っています。

山造りをとおして山村整備

「自分が手を入れた山がきれいになっていくのを見るのは爽快です。まだ駆け出しですが、山仕事は楽しくやりがいを感じています」。宮澤優人(まさと)さん(美里)は6年ほど前、山造りを生業にする道を選びました。スギ・ヒノキ・アカマツの人工林と天然の広葉樹林で、下刈り、枝打ち、間伐と、一年をとおし山仕事に奮闘しています。

育林は30年、50年という長い年月を要します。山造りは一年の作業を繰り返しながら、数十年先の時間を見通しているといえるでしょう。そしてこのような、長い時間を支える仕組みが、かつての農山村にはあったと考えられます。

そばの播種(美里そばの会)